

平成23年7月22日、原子力安全・保安院から当社に対し、「東京電力株式会社福島第一原子力発電所における事故を踏まえた既設の発電用原子炉施設の安全性に関する総合評価の実施について(指示)」が発出され、当社は、これまで各プラントにおいて、総合評価(一次評価)を行ってきておりますが、このたび、大飯発電所2号機の評価結果を取りまとめました。

1. はじめに(ストレステスト導入の経緯)

政府は、平成23年7月11日に、「我が国原子力発電所の安全性の確認について(ストレステストを参考にした安全評価の導入等)」を公表し、その中で、原子力発電所は現行法令下で適法に運転が行われていること、また、福島第一原子力発電所事故を受けて実施した緊急安全対策についても原子力安全・保安院による確認がなされており、従来以上に慎重に安全性の確認が行われているものの、定期検査後の原子力発電所の再起動に関しては、国民・住民の方々には十分な理解が得られているとは言い難い状況にあることから、新たな手続き、ルールに基づく安全評価を実施しました。

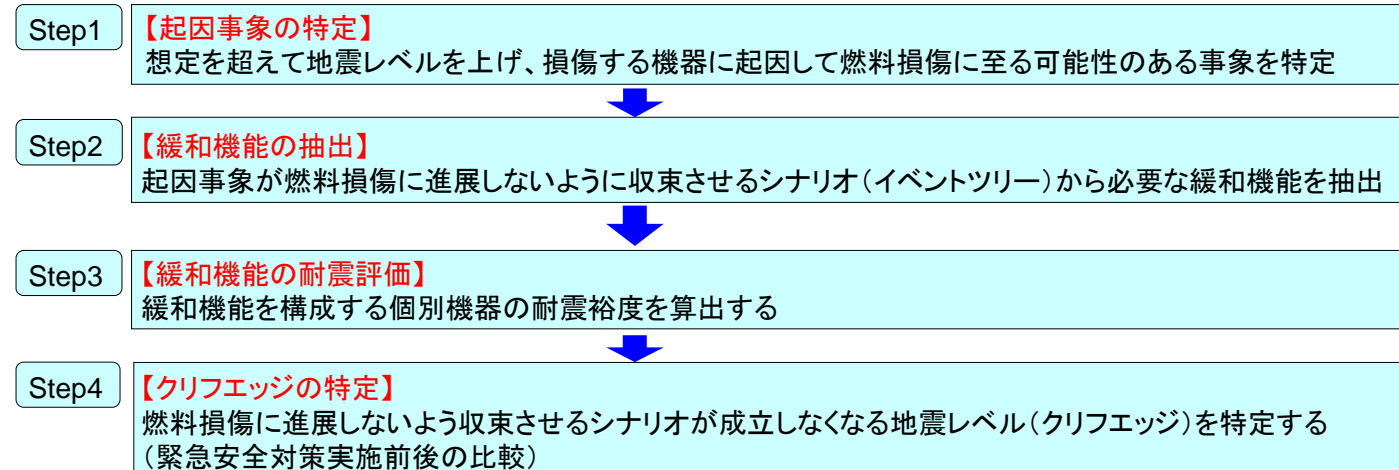
それを受け、原子力安全・保安院は、平成23年7月22日に電力事業者に対し、福島第一原子力発電所事故を踏まえた、安全性に関する総合評価(ストレステスト)の指示を出しました。

2. ストレステストとは

ストレステストとは、原子力発電所が想定を超える地震や津波等(=発電所にとってのストレス)に襲われた場合を想定し、その大きさを徐々に大きくしていった時に、安全上重要な施設や機器等が、どの程度まで耐えられるのかを調べた上で発電所として総合的に安全裕度を評価するものです。

評価には一次評価と二次評価があり、一次評価は、定期検査で止まっている発電所の運転再開の可否を、二次評価は、運転中の発電所も含め全ての発電所の運転継続の判断のために実施するものです。

3. 評価手順の概要 (地震の評価の場合)



4. 大飯発電所2号機の一次評価結果の概要

- 評価の結果、安全上重要な施設・機器等は、設計上の想定を超える事象(地震・津波等)に対する安全裕度を十分に有していることが分かりました。
- また東京電力福島第一原子力発電所の事故を踏まえて、これまでに実施した緊急安全対策等によって、さらに安全裕度が向上していることを確認しました。
- 今回の評価に用いた評価条件や許容値は保守的なものとなっており、今回評価した安全裕度を越えた場合でも、直ちに燃料の健全性が損なわれるものではないと考えています。

ストレステスト一次評価の項目

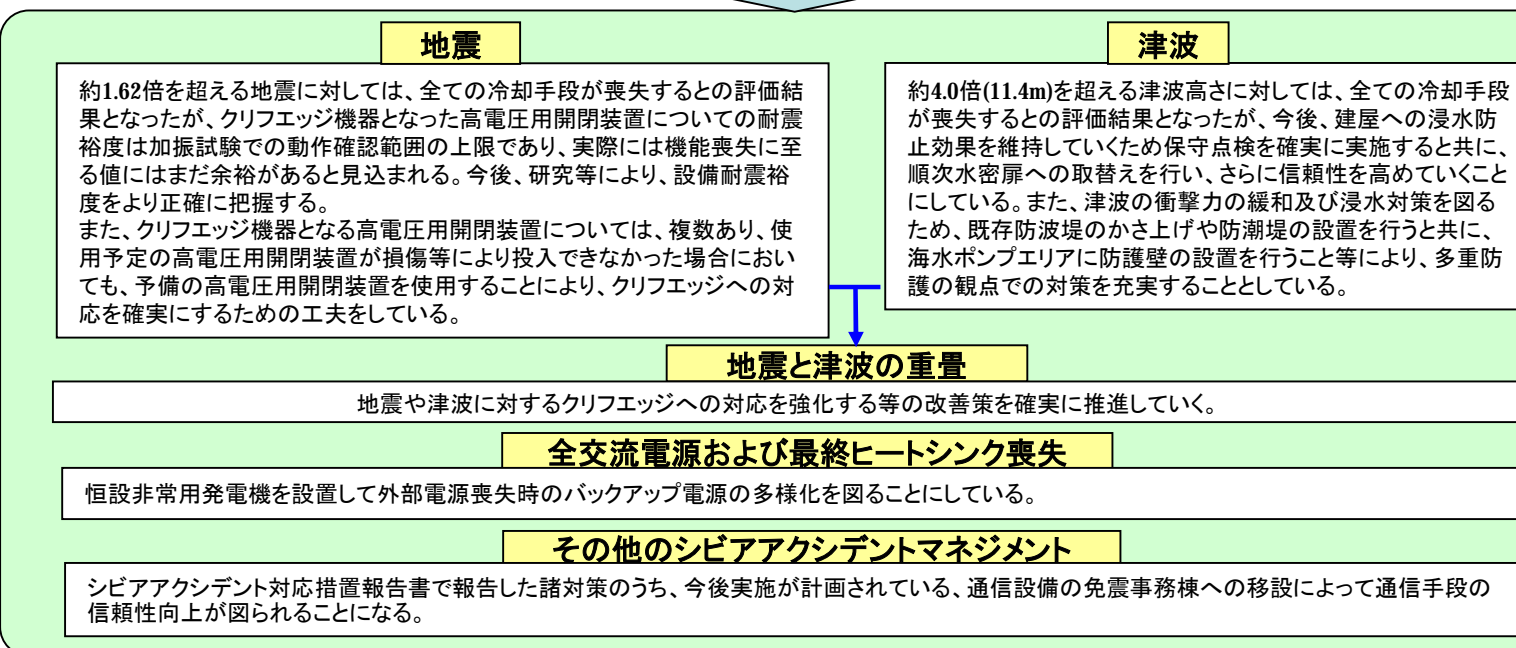
- **地震**: 想定を超える地震にどの程度の地震レベルまで燃料損傷せずに耐えられるか評価
- **津波**: 想定を超える津波にどの程度の高さまで燃料損傷せずに耐えられるか評価
- **地震と津波の重畳**: 想定を超える地震と津波の同時発生にどの程度まで燃料損傷せずに耐えられるか評価
- **全交流電源喪失**: 発電所が完全に停電(全交流電源喪失)した場合に、外部からの支援なしでどの程度の時間まで燃料損傷せずに耐えられるか評価
- **最終ヒートシンク喪失**: 燃料から除熱するための海水を取水できない場合(最終ヒートシンク喪失)に外部からの支援なしでどの程度の時間まで燃料損傷せずに耐えられるか評価
- **シビアアクシデントマネジメント**: これまでに事業者が整備してきたシビアアクシデントマネジメント策について多重防護の観点からその効果を明示

一次評価結果概要

	クリフエッジ評価の指標	クリフエッジ(下段: 対象となる設備)		緊急安全対策前 下段: 対象となる設備	安全確保対策 の効果
地震 (津波との重畳も同じ)	基準地震動Ss (700gal)との比較	約1.62倍(1134gal相当) 高電圧用開閉装置		約1.52倍(1064gal相当) 海水ポンプ	約7%向上
津波 (地震との重畳も同じ)	想定津波高さ (2.85m)との比較	約4.0倍(11.4m) タービン動補助給水ポンプ		約1.9倍(5.55m) 海水ポンプ	約105%向上
地震と津波の重畳時 におけるSBO (またはLUHS)	地震・津波に起因する SBO, LUHSにおいて、燃 料の冷却手段が確保でき なくなるまでの時間	炉心	約7.2日後 水源補給用消防ポンプガソリン	約5時間後 蓄電池	約34倍向上
		使用済燃料	約7.2日後(運転中) ビット水補給用消防ポンプガソリン	約10時間後(停止中) (水温が100°C到達時点)	約17倍向上
全交流電源喪失 (SBO)	地震・津波以外による SBO, LUHSにおいて、燃 料の冷却手段が確保でき なくなるまでの時間*1	炉心	約31日後 水源補給用消防ポンプガソリン*2	約5時間後 蓄電池	約148倍向上
		使用済燃料	約17日後(運転中) ビット水補給用消防ポンプガソリン	約10時間後(停止中) (水温が100°C到達時点)	約40倍向上
最終ヒートシンク喪失 (LUHS)		炉心	約31日後 水源補給用消防ポンプガソリン*2	約31日後 蒸気発生器給水用水源	炉心燃料を冷却できる 手段が増加した
		使用済燃料	約17日後(運転中) ビット水補給用消防ポンプガソリン	約10時間後(停止中) (水温が100°C到達時点)	約40倍向上

*1: 燃料の冷却手段がすべて利用できるとして評価
*2: タンク等の水源枯渇後に消防ポンプにより海水を補給できるが、発電所備蓄ガソリンは比較的早期に海水補給が必要となる使用済燃料ビットや他号機に全て使用して2号機の炉心冷却には使用できないとして評価した。

安全確保対策により炉心の冷却手段が多重化・多様化され、プラントの安全性が向上したことが確認できた



福島第一原子力発電所事故から得られた知見

【地震による影響】

- 地震発生により原子炉は正常に自動停止
- 地すべりによる送電鉄塔の倒壊等により外部電源が喪失
- 非常用ディーゼル発電機は全て正常に自動起動
- 原子炉の冷却に必要な機器は正常に動作

【津波による影響】

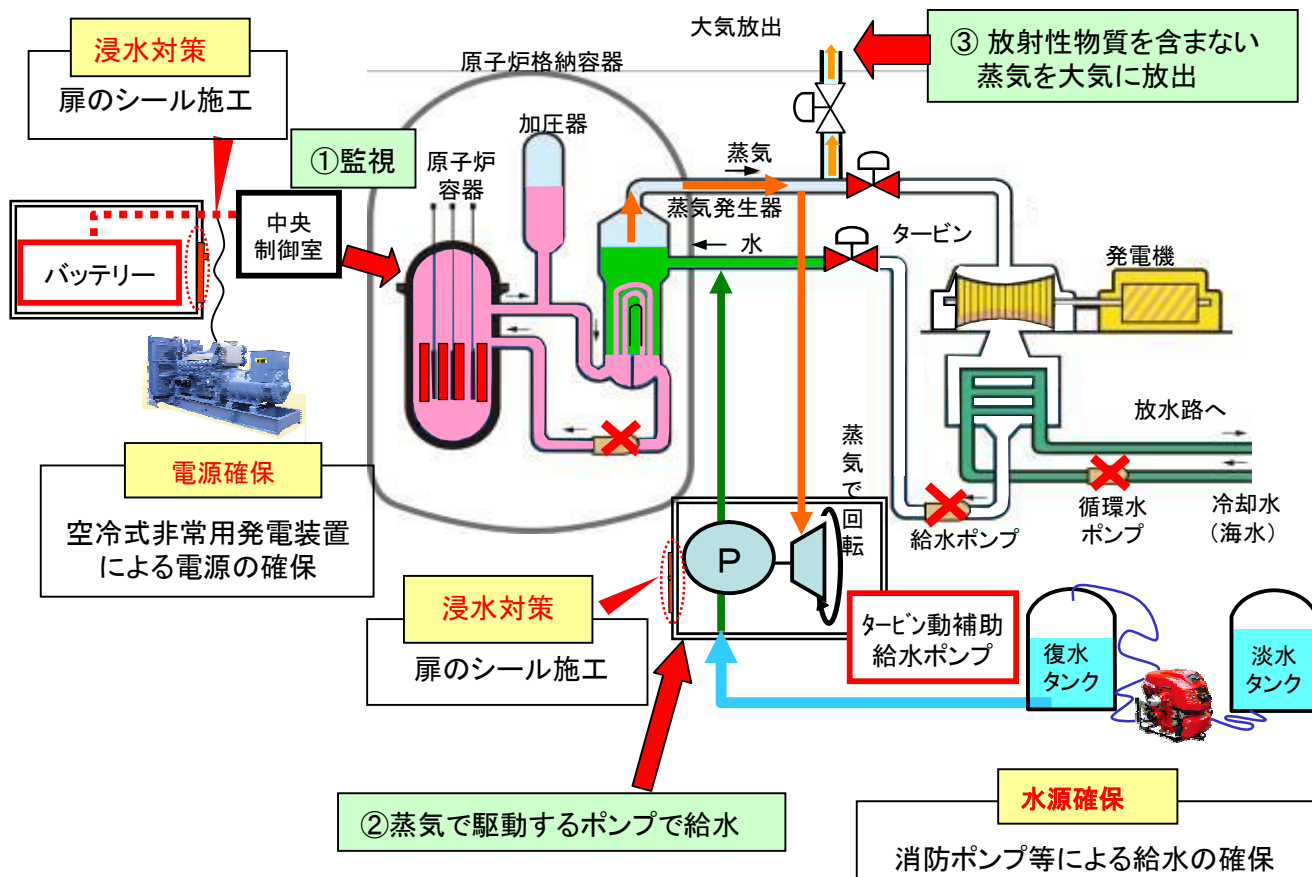
- 非常用ディーゼル発電機、配電盤、バッテリー等の重要な設備が被水
- 海水ポンプが損壊し、最終ヒートシンクが喪失(原子炉冷却機能喪失)
- 全交流電源喪失(外部電源と非常用ディーゼル発電機が喪失)

全交流電源喪失、最終ヒートシンク喪失が長期にわたり継続し、燃料の重大な損傷、格納容器の破損など深刻な事態に陥った

【安全確保対策】

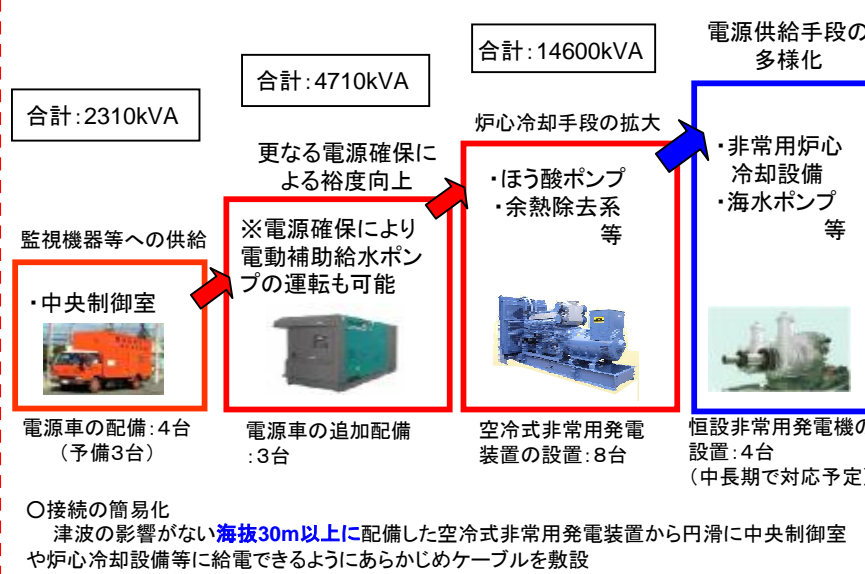
(加圧水型原子炉(PWR)の例)

- 全交流電源喪失の対策 ⇒ プラント監視をするために必要な電源設備を確保
- 最終ヒートシンクの喪失の対応 ⇒ 蒸気発生器への給水設備を確保
- 重要機器の被水防止 ⇒ 建屋の浸水対策を実施



電源確保への対応状況

ハード対策



ソフト対策

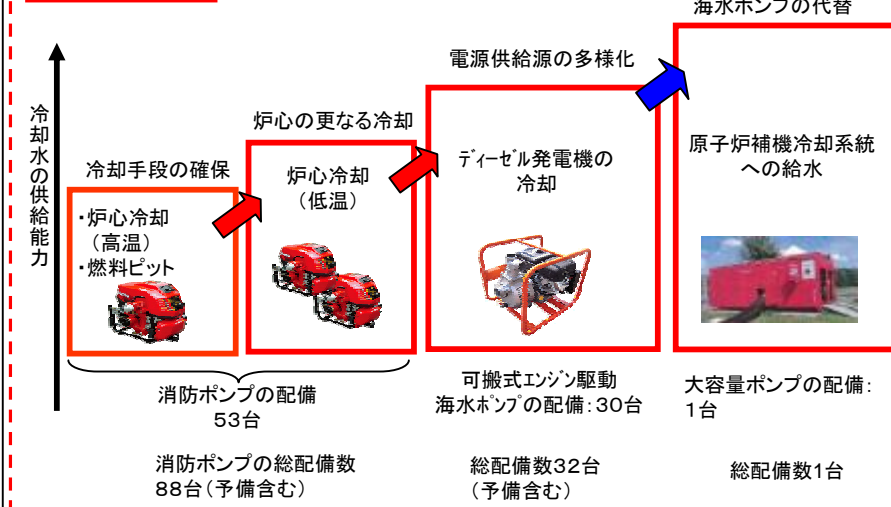
- 配備した電源車や空冷式非常用発電装置をすみやかに必要な箇所に接続するための対策
- 体制の確立
 - マニュアルの整備
 - 訓練の実施
- | | |
|-----------|--------|
| 休日・夜間 | 常に6名確保 |
| 平日訓練 | 52回 |
| 夜間訓練 | 8回 |
| 休日訓練 | 11回 |
| これまでの実施回数 | |
- (訓練項目)
 ・電源車の配置
 ・電源車の運転
 ・電源ケーブル接続
 ・電源車への給油



- 訓練の反映
 - ・夜間のヘッドランプの配備
 - ・作業性向上のため接続端子形状の改善 他
- 設備強化対策による接続時間の短縮
 電源車: 135分 ⇒ 空冷式非常用発電装置: 78分
 (全号機への給電が完了するまでの訓練実績)

水源確保への対応状況

ハード対策



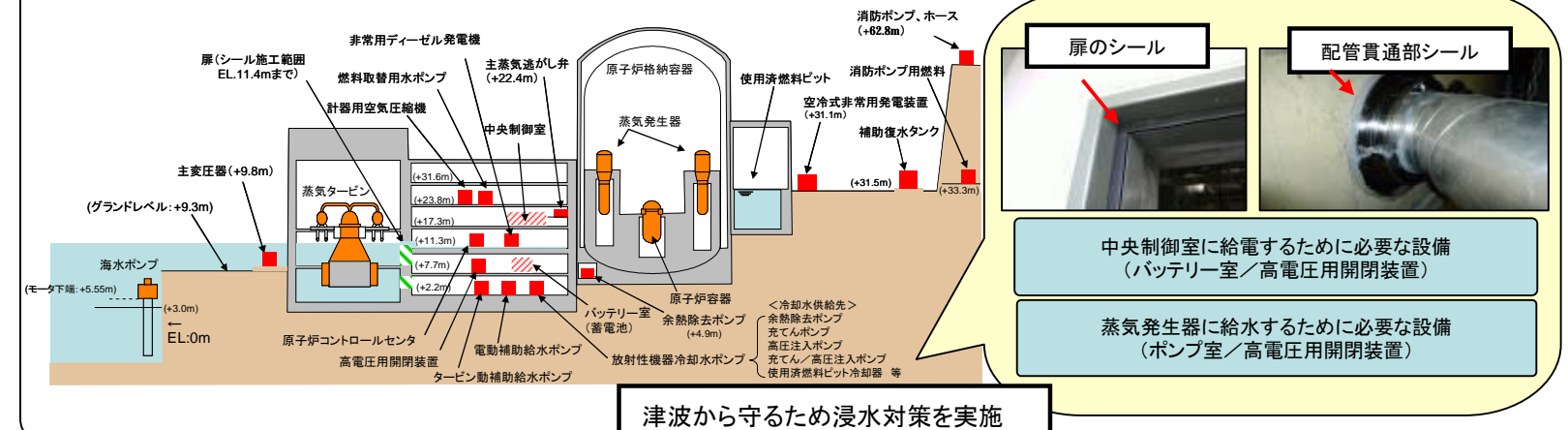
ソフト対策

- 配備した消防ポンプ等をすみやかに必要な箇所に敷設するための対策
- 体制の確立
 - マニュアルの整備
 - 訓練の実施
- | | |
|-----------|-----|
| SG給水訓練 | 48回 |
| SFP給水訓練 | 31回 |
| CSD訓練 | 25回 |
| これまでの実施回数 | |
- (訓練項目)
 ・ポンプの配置
 ・ポンプの運転
 ・ホースの敷設
 ・ポンプへの給油
 (※)CSD: 低温停止



- 訓練の反映
 - ・ポンプ設置箇所へのマーキング
 - ・連絡を密とするため無線機を配備 他
- 資機材の予備
 - ・消防ポンプ 必要台数53台/総数88台
 - ・ホース 必要本数631本/総数670本

浸水対策への対応状況



津波から守るため浸水対策を実施